

手術室見学実習における看護学生の学び

中井裕子* 笹山万紗代* 政時和美* 松井聡子**

Learning of nursing students in operating room visit training

Yuko Nakai Masayo Sasayama Kazumi Masatoki Satoko Matsui

要 旨

【目的】成人急性看護学実習時に提出した手術室実習記録に記載された学びに関連した記述から、学生の学びや感じた内容を把握する。

【方法】手術室実習記録から学びの内容などが含まれる文章を抽出しデータとし、類似性・相違性により分類・結合し、サブカテゴリー化・カテゴリー化し、その内容を検討した。

【結果】分析の結果、148データが抽出され、43サブカテゴリー、10カテゴリー「印象に残った手術室看護師の姿」「合併症予防」「安全」「確認の重要性」「心理的援助」「患者への配慮」「連携」「手術室看護師の専門性」「実体験に基づく知識の獲得」「継続看護」が抽出された。

【考察】本実習の学びのポイントと一致した6カテゴリーは、見学前日までに目標・学習計画を学生が立案し、教員の助言を得ることで学生自身が見学のポイントを把握して見学実習に臨むことができたためと考える。学びのポイントと異なる「印象に残った手術室看護師の姿」「心理的援助」「患者への配慮」は、学生の主体的な学びの結果であると考えられる。

キーワード：手術室見学実習、学生、学び

緒 言

看護教育の内容と方法に関する検討会報告書(2011)では、看護学生(以下、学生)は、臨地実習において講義や演習で学んだ知識を統合して個別の対象者に合わせて看護を提供できるようになることが期待される¹⁾としており、臨地実習は、既習の知識や技術を統合するための重要な学習の場である。A大学看護学部では、成人急性看護学実習において全身麻酔下で手術を受ける患者を対象とし、周術期看護を学ぶカリキュラムを構成している。周術期看護において術前・術後は病棟において看護過程を展開し、立案した看護計画に基づいて看護を実践している。一方、術中の看護は手術室において展開されるが、学生が実際に術中の看護計画を立案し、実施することは困難な状況にある。そこでA大学では、手術室見学実習を行っている。

A大学看護学部の成人急性看護学実習の目標にお

いて手術室見学実習に関連する目標は「治療によって対象者に起こった身体的・心理的・社会的影響や回復の過程について説明できる。」や「保健医療チームとしての看護の役割を説明できる。」「対象者の尊厳を守る倫理的配慮が行える。」である。これに基づき、手術室見学実習では「手術による合併症予防のための看護」、「手術室看護師の役割」、「多職種との連携」、「対象者への安全・安楽のための援助」を学びのポイントとして指導している。

近年は短時間で効率よく周術期看護を学ぶカリキュラム構成が求められることに加え、手術を受ける患者への倫理的配慮から、看護師基礎教育における手術室実習は減少傾向にある²⁾。周術期看護では手術や麻酔による侵襲を理解することが看護のポイントとなるため、手術中の患者の状態や看護に関する理解は欠かすことができない。これまでの研究でも、学生が手術室における実習から多くの学びを得てい

*福岡県立大学
Fukuoka Prefectural University
**福岡女学院看護大学
Fukuoka JoGakuin Nursing University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地
中井裕子
E-mail: nakai@fukuoka-pu.ac.jp

ると報告されている³⁻⁵⁾。本研究では、成人急性看護学実習時に提出した“手術室実習記録”に記載された学びに関連した記述から、A大学看護学部成人急性看護学実習における手術室見学実習の学生の学びや感じた内容を把握することを目的とする。

方 法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 研究対象

研究対象（分析対象）は、平成28年9月（3年次後期）から平成29年6月（4年次前期）に成人急性看護学実習において手術室見学実習を行い実習評価が終了し、かつ本研究に協力の同意が得られたA大学看護学部4年次生（研究対象者）が実習終了時に提出した“手術室実習記録”とした。

3. 研究期間

平成30年2月～令和元年7月

4. 手術室見学実習の概要

成人急性看護学実習は3週間（3単位）で、対象学生は3年次後期から4年次前期の学生である。全身麻酔で手術を受ける患者を受け持ち、実習を行う。実習2日目または3日目に手術室において1時間程度のオリエンテーションを受け、手術室の入室方法、構造・設備、看護師の役割などの説明を受ける。その後、受け持ち患者が手術を受ける際に手術に同行し、手術室見学実習を行う。実習日程の都合上、受け持ち患者の手術見学ができない場合は、実習先病棟の患者から手術見学の同意を得たうえで手術室見学実習を行う。学生は自分が手術室見学実習を行う前日までに“手術室実習記録”の「見学実習の目標」と「学習計画」の欄を記載し、実習担当教員へ提出しアドバイスを受ける。また、手術室見学実習翌日に「手術室実習の学びと振り返り」の欄を記載し、提出する。

手術室見学実習は成人急性看護学実習の目標である「治療によって対象者に起こった身体的・心理的・社会的影響や回復の過程について説明できる。」「保健医療チームとしての看護の役割を説明できる。」「

対象者の尊厳を守る倫理的配慮が行える。」の3つの目標に基づき、実習担当教員が事前にアドバイスを実施した。実習担当教員のアドバイスは患者や学生の状況によって異なるが、「手術による合併症予防のための看護」、「手術室看護師の役割」、「多職種と

の連携」、「対象者への安全・安楽のための援助」を学びのポイントとして教員間で共通認識し事前にアドバイスした。

5. 分析方法

1) 成人急性看護学実習時に提出した“手術室実習記録”を読み返し、学生自らが認識し表現した内容に焦点を当て、学生が学んだ内容、手術室見学実習が学生に与えた影響などが含まれる文章を抽出し、データとした。

2) 抽出したデータを熟読し、データ間の類似点や相違点の確認を繰り返し行った。類似したものを集約し、類別されたデータのかたまりごとの特性を明らかにし、サブカテゴリーとし命名した。

3) サブカテゴリー間での類似性、相違性により分類、結合し、カテゴリーとし、命名した。

抽出・カテゴリー化の過程において、信頼性・妥当性を確保するために研究者間で一致するまで学生のレポートの記述に戻ることを繰り返し、検討を重ねた。

6. 倫理面への配慮

研究依頼を行う際は、対象者全員に研究の目的や倫理的配慮について記した文書を配布し、口頭で説明した。研究依頼の際に、研究はすでに提出された記録物を使用するため、あらたに身体・心理的負担が生じることはないこと、記録物の評価やすべての科目における評価はすでに終了しており成績には全く影響しないこと、研究への参加や中断は自由意志であり、参加を拒否したことや中断したことにより不利益を受けることはないこと、データは本研究以外には使用しないこと、データは個人が特定できないように匿名化することなどを説明した。また、研究データは研究者が施錠できる場所に保管し、保存期間は研究成果の発表時点から10年保存した後、データは完全に消去し、文書はシュレッダーにかけ破棄することを約束した。さらに、回収箱を設置し、研究対象者に同意書を回収箱へ投函してもらい、直接受け取らないように配慮した。なお、本研究は研究者の所属する施設の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結 果

4年次生95名のうち、研究協力の同意が得られた者は71名（74.7%）であった。分析の結果、148データ、43サブカテゴリー、10カテゴリーが抽出された

表1 手術室見学実習の学びのポイントと一致または類似した学び

実習目的	カテゴリー	サブカテゴリー	データ
合併症予防の看護	合併症予防	合併症を予防するための援助	<ul style="list-style-type: none"> 術後合併症や体位固定による褥瘡・神経麻痺の予防のため、クッションやスポンジによる除圧、電気毛布による保温などに配慮する必要があると改めて学んだ 術中に神経が損傷したり、褥瘡が発生しないよう、外回り看護師は除圧のためのスポンジを敷き、医師も神経の走行を考慮して確認していたことから、合併症を起こさないために複数の人で確認することが大切であると学んだ
		合併症予防の重要性	<ul style="list-style-type: none"> 血栓予防と神経麻痺の予防のためにも、(中略) 大きな手術侵襲で起こる合併症は術中から対策することが重要であると学ぶことができた 術中から合併症予防は起こらないことができ、直後の低体温、低血圧、褥瘡、呼吸抑制、深部静脈血栓症、神経麻痺、意識レベルなどの観察が重要であると学ぶことができた
	継続看護	術後看護の示唆	<ul style="list-style-type: none"> 手術中の体位や手術の内容を実際にみると、術後の痛みの出現やしびれや麻痺の出現がどこにしやすいのかというのを考えることができた
安全・安楽の援助	安全	清潔	<ul style="list-style-type: none"> 手術室内の誰もが清潔の重要性について認識し行動しなければならないと感じた 清潔を保持するために、清潔動作を確実に行う必要があると考えた
		情報収集	<ul style="list-style-type: none"> 外回り看護師が病棟の看護師から引継ぎを行い特に手術に関与の大きいアレルギーや動揺菌の有無、既往歴に注意して情報収集していることが分かった 手術が安全かつスムーズに進むよう、アレルギーだけに限らず術前訪問時に確認し、事前の予測・準備が重要であることを改めて学んだ
		術前準備	<ul style="list-style-type: none"> 安全な手術を援助するには、役割を理解して実行しつつ、他職種と協力して手術がスムーズに終わるよう準備を徹底しておくことが大切になると思った
		危険察知	<ul style="list-style-type: none"> 手術野となる身体の解剖や術式をよく理解した上で、出血などを予測しながら、急な出血や変化にも直ちに対応することが重要だと学んだ
		事故防止	<ul style="list-style-type: none"> 体位の工夫では褥瘡や循環障害・神経障害を防ぐため、良肢位を保ち、十分に固定をし、転落などの事故も防いでいることを学ぶことができた
		患者を守る工夫	<ul style="list-style-type: none"> 患者が安全に極力侵襲が少なく手術が受けられるような工夫について学ぶことができた
		患者の状態把握	<ul style="list-style-type: none"> 意識のない患者の安全・安楽を守るためには様々な工夫と患者の状態に応じた看護と、患者の観察が必要であると学んだ
	リスクアセスメント	<ul style="list-style-type: none"> 手術中には各看護師や医師が起こりうるリスクを考慮しながら手術がスムーズに行われるよう行動しているのだと思った 	
	確認の重要性	誤認防止	<ul style="list-style-type: none"> 病棟看護師から引き継ぐ際、手術室へ入室後も何度も患者の確認を行っており、誤認防止の為の方法を学んだ 手術前、患者さんに氏名や手術部位、生年月日を確認したり、医療者間でも薬や術式、物品などを何度も確認していて、何度も確認することでミスがなくことの重要性や、薬や手術の誤認はあってはならないことであると改めて感じた
		体内遺残防止	<ul style="list-style-type: none"> 使用した物品やガーゼは外回り看護師と器械出し看護師が声を出して確認しており、ガーゼや針の体内への残留がないようにするために必要なことだと学んだ
声出し確認		<ul style="list-style-type: none"> 使用したガーゼの枚数や出血量を報告する際には、大きくはっきりとした声で言うことで聞き間違いや伝達ミスがないように工夫していることを学んだ 	
多職種との連携	連携	多職種連携	<ul style="list-style-type: none"> 多職種がそれぞれ自分の行うべき仕事を行いながらも、点検や無菌操作時には互いに協力し合っている姿が印象に残った 手術は多職種が連携することによって安全に実施することができるということを学んだ
		コーディネーターの役割	<ul style="list-style-type: none"> 手術室での看護師は各職種の中で一番患者の情報を持っていることもあり、他職種への情報提供や、少しでも患者への負担がある点を見つけると医師に指示を出して改善するなどしており、看護師の視点から全体を見ることが重要なのだと学ぶことができた
		多職種間の相互理解	<ul style="list-style-type: none"> 他職種とのコミュニケーションでは、やはり日頃から情報交換や意思疎通をおこない、また互いが互いの役割を認識し自分が動ける場合は補助ができる態勢を保っておく必要があるのだと学んだ
		引き継ぎ	<ul style="list-style-type: none"> 術中の出来事や気になったことを伝えることで、今後のケアで何が必要なのか、どこに注意すべきなのかを判断することができるので、1つ1つの出来事をアセスメントし、伝えることの大切さを改めて感じた
手術室看護師の役割	手術室看護師の専門性	手術室看護師の役割	<ul style="list-style-type: none"> 手術室での看護師は書類の記入、薬品の準備、環境整備など常に動いていて役割、専門性の高さを感じた
		挿管介助	<ul style="list-style-type: none"> 看護師は挿管時に必要な物品を事前に準備しており、挿管手順を正確に把握し、スムーズな気管挿管のために適切な介助が必要だと学んだ
		外回り看護師の役割	<ul style="list-style-type: none"> 外回り看護師の術中の業務は想像していたよりも多方面に及び、(中略) 色々な部分に神経をはりめぐらせなければならないことが分かった。
		器械出し看護師の役割	<ul style="list-style-type: none"> 器械出し看護師は、清潔と不潔の区別をしっかりと留意し、医師へ物品を渡し、使用後の物品を瞬時に受け取るために、物品の種類や位置を把握するだけでなく、順序よく並べたり、渡す前に器具のセットを行うなどの役割があり、素早い行動が重要であると学んだ

表2 手術室見学実習の学びのポイントと異なる学び

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
印象に残った手術室看護師の姿	手術進行の予測	<ul style="list-style-type: none"> ・医師の動きを理解して手術がスムーズに進むよう、無駄なく動かなければならないということを学んだ ・次に起こりうる事態をあらかじめ考え想定しておくことで、素早い対応につながると考えられる
	手術の知識	<ul style="list-style-type: none"> ・術式や流れ、手術に関する用語など理解することが、手術室看護師としての第一歩だと感じた ・患者の術式や体格によって方法は異なるため、様々な術式や体格に対応できる知識と技術が必要であると学んだ
	的確な技術	<ul style="list-style-type: none"> ・滅菌・無菌操作がとても早く、知識と技術を深めていると思った ・手術がスムーズに且つ患者にとって安全に進行できるように出された指示を素早くて正確に実施する必要があると学んだ
	アセスメント力	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師は何気なく援助しているようだが、1人1人患者の疾患や状態、体格が違うため、自然と一連の動作の中で患者に必要な援助は何か瞬時にアセスメントし、ケアしているのだと思った ・急性期は患者の状態が変わりやすいため、臨機応変に対応するための判断力、観察力が特に求められていると思った
	観察力	<ul style="list-style-type: none"> ・観察ポイントを多く正確にわかっていないといけなかったとわかった。 ・外回り看護師は、麻酔による身体侵襲をしっかりと把握し、モニター観察により異常な変動を早期に発見することが重要であると学んだ
	個別性を考慮した援助	<ul style="list-style-type: none"> ・その時の患者の体位に合わせた看護が行われていることが分かった ・手術室の看護師は、術式や体位によって変わる患者の状態に合わせた看護が必要であった
心理的援助	声かけ	<ul style="list-style-type: none"> ・脊椎麻酔をしている間に、看護師が今何をしているのかといったことを患者に伝え、患者の不安を緩和させるような声かけが行われているということを知ることができた ・患者が入室した後はひとつひとつの動作に声をかけ、今から患者はどのようにしたらいいのか、何をされるのかを知ることとなり、手術を直前にした中での不安軽減することになっていると感じた
	説明	<ul style="list-style-type: none"> ・麻酔導入時には外回り看護師が今から患者にとってどのようなことが生じるのかを説明していた ・麻酔導入時にも、患者に起こる反応を正しく伝えることで患者が安心して手術に向き合えることができると学んだ
	タッチング	<ul style="list-style-type: none"> ・タッチングをすることで手術室でも患者さんに安心してもらえるように関わっており、術中の慣れない環境で少しでも患者さんの恐怖心がなくなるよう関わる必要性を学んだ ・声かけやタッチングなど、患者が少しでも安心してできるような配慮をすることが看護師としての重要な役割であるということを感じた
	寄り添い	<ul style="list-style-type: none"> ・そばに寄り添う姿が見られ、看護師の手は患者に触れ、精神的なサポートが行われていたと考えられる ・患者との少ないコミュニケーションの中でも患者に寄り添う看護を学ぶことができた
	穏やかな態度	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の不安や緊張を最小限にするために、看護師は穏やかに一貫した態度で関わっていると学んだ
	室内環境	<ul style="list-style-type: none"> ・入室すると手術室内はBGMがかかっており、患者が抱えている不安な気持ちを少しでも和らげる効果があると考えられる
患者への配慮	プライバシー保護	<ul style="list-style-type: none"> ・患者に合わせたケアを行うことや、全身麻酔で眠っている状態で行う手術であっても、患者のプライバシーを考え露出を最小限にすることや、体温保持のため体を包むことはとても大切なことである ・術中に手術が中断する時間があったが、その時間も看護師は患者さんのプライバシー保護のためにタオル位置を調節したり、患者さんを放置してしまわないように工夫されていて倫理的配慮がされている所も見学できた
	患者の状態に合わせた配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・患者が痛みを訴えると一旦中止し、落ち着いてから再開しており患者への配慮がなされていると感じた
実体験に基づく知識の獲得	気管内挿管による生体反応	<ul style="list-style-type: none"> ・麻酔がきれ始めた時には、患者が無意識的に手を下におろしたり足を立てたりする動作が何度かあり、これはアドレナリンが増えることによる生体反応であることも学んだ
	手術室のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・医療者の間にはあまり緊張感がみられない場面もあり談笑している様子を見て手術室のイメージが変わった
	手術侵襲の大きさ	<ul style="list-style-type: none"> ・点滴や麻酔をする際に患者は顔をしかめていることや、手術により体に傷がつくことから、患者にとって手術は侵襲の大きいものであることを実感できた
	手術台の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に患者が乗っている手術台を見ると幅が狭く、おうつがあることがわかった
不安の緩和	<ul style="list-style-type: none"> ・病棟の方で「不安はない。」と言われていても、慣れない環境、初めての手術となると不安が全くないわけではないので心理的なケアを行うことの大切さを学ぶことができた 	

(表1、表2)。抽出されたカテゴリーは、印象に残った手術室看護師の姿、合併症予防、安全、確認の重要性、心理的援助、患者への配慮、連携、手術室看護師の専門性、実体験に基づく知識の獲得、継続看護であった。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、データを〔 〕で示す。

1. 手術室見学実習の学びのポイントと一致または類似した学び

手術室見学実習の学びのポイントである「手術による合併症予防のための看護」、「手術室看護師の役割」、「多職種との連携」、「対象者への安全・安楽のための援助」と一致または類似した学びは、【合併症

予防】【継続看護】【安全】【確認の重要性】【連携】
【手術室看護の専門性】の6カテゴリーだった。【合併症予防】と【継続看護】は「合併症予防のための看護」、【安全】と【確認の重要性】は「対象者への安全・安楽のための援助」、【連携】は「多職種との連携」、【手術室看護の専門性】は「手術室看護師の役割」と、手術室見学実習の学びのポイントとの一致または類似が認められた。

「合併症予防のための看護」では、〔術後合併症や体位固定による褥瘡・神経麻痺の予防のため、クッションやスポンジによる除圧、電気毛布による保温などに配慮する必要があると改めて学んだ〕と〈合併症を予防するための援助〉や〈合併症予防の重要性〉から【合併症予防】について学んでいた。また、〔手術中の体位や手術の内容を実際にみると、術後の痛みの出現やしびれや麻痺の出現がどこにしやすいのかというのを考えることができた〕という〈術後看護の示唆〉は、合併症を予防するために手術室から病棟あるいは退院後の生活における【継続看護】を行うことの重要性を学んでいた。

「対象者への安全・安楽のための援助」では、術前には〈情報収集〉によって得られた情報をもとに〈術前準備〉を行い、術中は常に〈清潔〉が厳重に保たれ、転倒・転落を防ぐ〈事故防止〉やその場で起こっている危機に素早く気付けるよう〈危険察知〉し、〈患者の状態把握〉をしながら〈リスクアセスメント〉に基づき今後起こり得ることに備え、患者の個性を考慮し知識や経験から導き出された〈患者を守る工夫〉が行われていることから【安全】について学んでいた。また、〔病棟看護師から引き継ぐ際、手術室へ入室後も何度も患者の確認を行なっており、誤認防止の為の方法を学んだ〕という〈誤認防止〉や〈体内遺残防止〉、〈声出し確認〉が繰り返し手術室内で実施されていることから【確認の重要性】を学んでいた。

「多職種との連携」では、執刀医や麻酔科医、臨床工学技士らと常にコミュニケーションをとる手術室看護師の姿から〈多職種の相互理解〉に基づいた〈多職種連携〉を目の当たりにし、多職種が混在する手術室内では看護師が〈コーディネーターの役割〉を果たす意義を再認識し、手術室入室・退室時に手術室看護師と病棟看護師の間で行われる〈引き継ぎ〉からも【連携】の重要性を学んでいた。

「手術室看護師の役割」では、〔手術室での看護師

は書類の記入、薬品の準備、環境整備など常に動いていて役割、専門性の高さを感じた〕という〈手術室看護師の役割〉や〈外回り看護師の役割〉、〈器械出し看護師の役割〉、〈挿管介助〉など【手術室看護の専門性】を学んでいた。

2. 手術室見学実習の学びのポイントと異なる学び

手術室見学実習の学びのポイントと異なる学びは、【印象に残った看護師の姿】【心理的援助】【患者への配慮】【実体験に基づく知識の獲得】の4カテゴリーだった。

【印象に残った看護師の姿】では、〈的確な技術〉を身につけ、〈手術の知識〉に基づいた〈アセスメント力〉や〈観察力〉によって〈手術進行の予測〉や〈個別性を考慮した援助〉ができることを学んでいた。

【心理的援助】では、手術室に入室し緊張と不安が高まっている患者に対して、BGMをかけて〈室内環境〉に配慮し、〈穏やかな態度〉で〈寄り添い〉、〈声かけ〉や〈タッチング〉、丁寧な〈説明〉を行っていることを学んでいた。

【患者への配慮】では、露出を最小限にするなどの〈プライバシー保護〉、患者の訴えを尊重するなどの〈患者の状態に合わせた配慮〉がなされていることを学んでいた。

【実体験に基づく知識の獲得】では、〈手術侵襲の大きさ〉や〈気管内挿管による生体反応〉、〈手術台の特徴〉、〈不安の緩和〉を学び、〈手術室のイメージ〉が変化していた。

考 察

1. 手術室見学実習の学びのポイントと一致または類似した学び

【合併症予防】【継続看護】【安全】【確認の重要性】【連携】【手術室看護の専門性】の6カテゴリーの学びが手術室見学実習の学びのポイントと一致または類似したことは、事前指導が大きな要因であると考えられる。成人急性看護学実習では、手術室見学実習前日までに目標と学習計画を立案するよう学生に指導した。学生は事前学習内容と受け持ち患者の術式を統合して目標と学習計画を立案する過程で、学びのポイントを改めて確認し、教員からの助言でさらに意識づけされて手術室見学実習に臨む。そのため、手術室実習記録にも学びのポイントに応じた記述が多くなると考える。これは、教員が手術室見学実習

に期待する学びを得ている学生が多い、と考えることができる。しかし、成人急性期看護学実習までに手術患者に接する機会のほとんどない学生が、刻一刻と状態の変化する周術期の患者を理解することは多くの困難を要する。さらに学生は、実習後は肯定的なイメージに変化するものの、実習前は手術室を脅威として捉える傾向がある⁶⁾ため、手術室見学実習が加わることでより逼迫した状況に陥りやすいと考える。レディネスが不十分な学生や患者理解が遅れている学生にとって、手術室見学実習の準備と実施は大きな負荷となり、貴重な手術室見学実習での学びが得られない可能性も予想される。また、教員の助言に忠実なあまり、学生の学主体的な学びを妨げる可能性もある。手術室見学実習の事前指導の際は、学生の学習状況や個性を的確に捉え、学びのポイントを抑えた学びに加え、学生の主体的な学びの可能性を妨げないような配慮が必要である。

2. 手術室見学実習の学びのポイントと異なる学び

【印象に残った看護師の姿】【心理的援助】【患者への配慮】【実体験に基づく知識の獲得】の4カテゴリーの学びが手術室見学実習の学びのポイントと異なっただのは、前述した学生の主体的な学びの結果であると考えられる。成人急性看護学実習までに実際の手術室看護に接した経験のある学生は少なく、学生にとって手術室は未知の領域であるため、手術室見学実習に対して緊張や不安と同時に期待や関心をもって臨む。その結果、手術室見学では学生なりの感性で様々なことを感じ取っていることがわかった。これら学生の主体的な学びは、大谷ら⁷⁾の「手術室見学実習では、看護師の責任範囲において、学生は看護師と共に実践に参加し、その実践の中で学生自身が意味を獲得していく、という学習」にあるように、手術室見学実習における学びであると言える。この貴重な学びが十分に得られるよう、実習環境や指導体制のさらなる充実にも今後も継続的に取り組む必要があると考える。

【実体験に基づく知識の獲得】の記述から、学生は事前に学習した内容を実際の看護と照合し、看護の意味を理解しその必要性を実感し、学びを深化させていた。さらに【印象に残った看護師の姿】の記述から、学生は手術室看護師の能力の高さに感嘆しつつ、それらの能力が備わっていなければ患者の安全・安楽を守りスムーズに手術を進行することができないことを理解した。その学びは学生自身の知識

や技術の習得への意欲、観察力やアセスメント力を向上させることの意義の認識につながり、実習のモチベーションの維持・向上にもつながると考える。

【心理的援助】や【患者への配慮】の記述から、学生は手術室看護師が細やかで丁寧な看護を実施していることを学んでいた。これは、手術を受ける患者が学生の受け持ち患者であることも一因であると考えられる。術前の患者と学生が関わる時間は短い、少なくとも学生は術前の患者に挨拶をして言葉を交わし患者の人となりに接しており、患者への思い入れや関心が高い。そのため、手術が近づくにつれ緊張が高まり、不安が増大する患者の様子を我がことのように感じることが多い。よって、看護師の心理的援助や配慮を敏感に感じ取っていると考える。同時に、患者の姿そのものからも心理的援助の必要性を感じたと考える。

結 論

1. A大学看護学部4年次生71名の“手術室実習記録”の記述から、148データ、43サブカテゴリー、10カテゴリーの手術室見学実習の学びが抽出された。
2. 手術室見学実習の学びのポイントと一致または類似した学びは、【合併症予防】【継続看護】【安全】【確認の重要性】【連携】【手術室看護の専門性】の6カテゴリーだった。
3. 手術室見学実習の学びのポイントと異なる学びは、【印象に残った看護師の姿】【心理的援助】【患者への配慮】【実体験に基づく知識の獲得】の4カテゴリーだった。

謝 辞

本研究に協力していただいたA大学看護学部の学生の皆さまに深く感謝いたします。

本研究に関連する利益相反はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 (2011年).
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf> (2019年8月22日アクセス)
- 2) 北林司, 矢嶋和江, 板垣喜代子他. 模擬手術演

- 習による看護学生の学習体験の分析. 群馬パース大学紀要 2006 ; 2 : 79-84.
- 3) 池田奈未, 百田武司, 植田喜久子. 手術室実習における看護学生の学び. 日本赤十字広島看護大学紀要 2012 ; 12 : 71-78.
- 4) 坂東孝枝, 雄西智恵美, 今井芳枝他. 手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験. 日本看護学教育学会誌 2012 ; 22(2) : 13-25.
- 5) 堀越政孝, 辻村弘美, 恩幣宏美他. 手術室見学実習における学びの内容—術中レポートの分析—. 群馬保健学紀要 2010 ; 30 : 67-75.
- 6) 吉井美穂, 八塚美樹, 安田智美他. 周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌 2004 ; 5(2) : 103-107.
- 7) 大谷則子, 堀之内若名, 中井裕子他. 手術室見学実習における学び—二つの実習形態の比較検討による考察—. OPE nursing 2006 ; 21(6) : 98-108.
- 受付 2019. 8. 30
採用 2019. 12. 12

